

軽微な自傷を伴う若者へのエンパワメントアプローチ

八尋 茂樹

目次

- I. はじめに
- II. 事例 高校2年生M（軽微な自傷行為症状）への施療事例
 - 1 問題の背景と経過
 - 2 援助開始
 - 2-1 第1フェイズ：援助方針の設定と介入
 - 2-2 第2フェイズ：援助計画の変更と再介入
 - 2-3 第3フェイズ：援助計画の再変更及び再々介入
 - 2-4 第4フェイズ：援助の継続と終結
- III. 考察
 - 1 I Pの言説による新しい物語の生成の効果
 - 2 I Pの言説に重点を置くアプローチにおけるリスク
- IV. 結びにかえて
- 註
- 参考文献

Abstract

In this paper, the system theory is applied to support and intervene an adolescent with mild self-mutilation. Especially it is considered from the point of view of a strength-based approach and a narrative approach. The issues of an identified patient are solved through dialogue, and after a few iterations, it is felt that one of the most useful method should be based on his/her cultural preference. So the workers have to give importance to a preference survey from him/her. The author sets up a hypothesis that remodeling dolls in his/her own image is very useful to stop self-mutilation. The case of this paper tells that this methodological study has possibilities and productive, future issues.

キーワード：軽微自傷、エンパワメント、ストレンクス、ナラティブアプローチ、サブカルチャー

I. はじめに

個別援助技術とは、I P（Identified Patient）の主体性を尊重した、文字通り個別的なアプローチであるが、特に本稿が目指す手法は、Strength-Based Approachにおけるストレンクス視点に立っており、I Pとの対話の中で、I Pの育成歴、生活形態や、その影響下にあるスキーマ（認識の形式や構造）を言語化、物語化させることで、

IPに自身の内にある資源を肯定的に消化させ、自己効力を強化することを目標としている。

本稿では、軽微な自傷行為症状のあるIPの事例を採り上げ、IPと筆者（以下援助者）の協働によるエンパワー過程を考察した。IPと援助者の関係性（パートナーシップ）の中で、IPのこれまでの言説から再現された物語を整理、確認し、さらにそこから協働的に新たな物語を生成し、IPの中に拡張的な世界観を持たせることによって、対峙している問題状況から脱却させようとする援助手法を検討する。

II. 事例 高校2年生M（軽微な自傷行為症状）への施療事例

家族構成：母親K（45歳）、M（16歳）／父J（46歳）

1 問題の背景と経過

私立高校2年生のM（16歳）は、中学2年の時に保険会社勤務の父J（以下父）が単身赴任となったため、以来、母K（以下母）とふたり暮らしとなった。学校では大人しく、あまり目立たない存在であり、小学校、中学校と特に問題行動は見られなかった。

Mは高校受験において、志望校の公立高校に不合格となり、地元の私立高校に不本意入学したことを大変気にしていた。高校1年時の担任教諭の目に、「Mは気難しいところもあったため、級友は腫れ物に触るような付き合い方をし、親友もいない」と映っていたように、ことあるごとに「自分は本来こんなところにいる人間ではない」と繰り返していたため、級友たちは「話すストレスがたまる存在」とMを評していた。

高校1年生の2学期末試験直前、ひとりで昼食の弁当を食べていたMに、中学時代から良く知る級友から「食事の仕方が汚い」と指摘され、近くの席の女子たちに嘲笑されたことに腹を立て、その日の午後は早退した。翌日の朝食時、お湯が沸き、母がガスを止めに行く際に立て箸をしたことをMは不快に思い、突然大声を出して暴れ始め、壁やドアを蹴破ったりした。その日は遅刻したものの登校。しかし、2日後の期末試験前夜、再び自室で大声を出して本を何冊も引きちぎったり、シャーペンは何本も折ったりした。一晩眠ると落ち着き、翌日からの試験には出席。以後、1週間に2度3度と暴れるようになっていった。この頃から、母は学級担任に毎日のように電話で相談するようになる。「父親不在の家庭状況を補うために、男性の身内の援助を仰いではどうか」という担任の助言に従い、叔父（母の弟）にMの生活態度を定期的に厳しく注意してもらう。以後、Mは急速に大人しくなり、問題は治まったように思われた。

高校2年生の4月中旬、母は、入浴後にTシャツ姿でいたMと鉢合わせとなり、その際、Mの左腕に無数の切り傷（スラッシュ）があることに気付く。自傷に明るくなかった母はMが怪我をしたのだと思い気遣うが、Mは邪険そうに自室に戻ってしまった。その日から間もなく、掃除中にMの机の引き出しに大きさの異なるカッターナイフやカミソリが多数あることに驚く。母はMが他の生徒と喧嘩をして傷を負い、復讐のためにカッターなどを集めているのではないかと思いを巡らし不安になる。再び担任教諭に相談したところ、後日「M君の手首に切り傷らしいものが少し見えましたが、リストカットなどはされていませんか」と聞かれる。母が以前、Mの腕に無数の切り傷があったことを伝え、この時点で初めてMの自傷が明らかになる。担任と母がMにメンタルクリニックでの受診を勧めるも、Mはそれを拒絶。ここで母より「専門の医療機関で受診させるのを手伝ってほしい」と筆者らの援助グループに相談が入る（2007年4月20日受理）。翌日、Mの父と連絡を取った後、M、母、叔父、援助者の計4名によるインタビュー面接を実施。さらにその直後、援助者とMのみでの面談を実施した⁽¹⁾。

2 援助開始

2-1 第1フェイズ：援助方針の設定と介入

インタビュー面接では、母、叔父からこれまでの経過（前節に提示）が伝えられたが、生命の危険、精神状態の異常を危惧し、最終的には「自傷を止めさせる方法があれば、是非お願いしたい」、「すぐに止めさせるのが無理ならば、医者に診察してもらうように説得してほしい」と何度も繰り返された。母と叔父が同席しているこの面接ではMは非常に無口であったため、Mの口からほとんど情報を引き出すことはできなかった。Mがこの面接の席に着いたことも含め、Mに対する叔父の圧力が非常に強いことが感じられたため、2時間ほどで4名での面接を終了し、次の1時間、Mと援助者の間で話をする場を設けた。ここでは、援助者はMが自傷を行っているという事実確認よりも、Mの嗜好の聞き取りに重点を置いた。なぜならば、この日、Mは黒のロングTシャツを着てきたが、それはスカル（髑髏）のプリントに、襟から左胸にかけてファスナーが付いたものであり、また、首周りには小さな十字架のついたチョーカーをしており、これは典型的なゴシック・パンクを好む若者がするファッションであったからである。メディア、特にインターネットの発展によって、「ゴシック・パンク、ゴシック・ロリータ＝自傷」という誤った印象が一部に浸透しているため、Mもこの図式に則って自傷を繰り返しているのではないかと援助者は予測した。この面談では自傷については一切触れず、Mの日常生活について質問をしたところ、漫画やアニメを愛好していること、インターネットをよく利用すること、ゴシック・パンクのファッションが似合うような細身の体型でありたいこと、学校には同じ趣味の仲間（ゴシック・パンクの愛好者）がおらず残念に思っていることなどを雄弁に語った。援助者は、母や叔父から語られることのなかったM自身による生活歴や嗜好に着目し、翌週、再びMとふたりで面談をする約束をし、母と叔父からも了承を得た。

翌週末、Mは、やはり髑髏や蜘蛛の巣がデザインされた黒のロングTシャツを着用してやって来た。しかし、Mの携帯電話に、ハーケンクロイツ（鉤十字）のストラップが付いていることに気が付いた。それをMに問うと、自分の好み（ファッション）に合うので購入したとのことであった。Mが十字架のチョーカーとハーケンクロイツのストラップを平衡的に愛用していることから、M自身は「ゴシック・パンク」の愛好者であると自認しているものの、ファシズム・ファッションと混同している点を確認した⁽²⁾。この日の面会も、話題はファッションに終始した⁽³⁾。このため、第2フェイズより、Mとの対話において、ゴシック・パンクを接点として、コミュニケーション（特にMの内において自傷と結びついている誤ったイメージの修正）を推し進めていくこととした。

前回の面会において、Mが自宅から車で1時間ほどの繁華街（中でも若者向けのテナントが多数営業されているショッピングビル）に行ってみたく口にしていたため、2日後（ゴールデンウィーク中）に一緒に行く約束をする。Mの目的は、このショッピングビルにあるゴシック・パンクやゴシック・ロリータ関連の衣服や小物を販売している店舗を訪れることであった。Mはパンクファッションの理解者であるメール友達（女子高校生、中学生時の同級生）へのプレゼントとして小物を購入したかったが、この店舗は女性向けであるため、「自分ひとりでは入店しづらかった」と援助者に何度も感謝した。

繁華街からの帰途、車の中でMは自傷（特にアームカット）について初めて語った。高1の冬、学校で気に入らないことが起こった日、腕に無数の傷があるゴシック・パンク調の男性の画像を偶然自室のパソコン（インターネット）で目にし、惹かれていったという。興味本位で自宅の2種類のカッターナイフを使用して上腕外側を切ろうとしてみたが上手にできず、百円均一ショップや大型スーパーマーケットに出向いてカッターナイフやカミソリを購入し、傷をつけてみたという。その時には単に「自分が別の世界に行けた」ように思えたという。同じ週で再び嫌な思いをした日、学校からの帰宅途中に立ち寄ったドラッグストアで購入したカミソリで前腕の内側（肘と手首の間点）を切ってみたところ、「美しく血が流れた」ことで嫌な思いが忘れられた。以来、1週

間から2週間に1回の割合であるが、時には一度に数本の傷をつけることもあった。Mとしては、「やる（切る）ところもなくなってきたから、もう止めようかなと思っている」とも口にしており、援助者が一度カウンセリングだけでも受けてみることを提案すると、Mは素直に受諾した。

翌日、自宅に近い病院（心療内科）に予約を入れ、1週間後から母に付き添われてMは通院した。しかし、カウンセリング2週目、Mは「医師との相性が悪い」という理由から通院を拒絶するようになった。援助者は母親に別の病院でのセカンドオピニオンを勧めたが、Mがそれを拒否したとの返事その日のうちにあったため、翌々日に援助者はMの自宅を訪問し、Mと再度対話を持つこととした。

2-2 第2フェイズ：援助計画の変更と再介入

Mは「医師が自分に対し侮蔑的な接し方をするので二度と行きたくない」と繰り返した。この日の夜、援助者はMの自室に初めて入ることができた。Mの主張を聞きながら、部屋に目を配ると、意外にもゴシック・パンクのグッズよりも漫画本やアニメのDVDの量が多いことに驚いた。最初の面談時にMは漫画やアニメを愛好していることは語っていたが、割合的にファッションの話が中心となっていたため、援助者は焦点を誤っていた。Mが治療の拒否を繰り返し主張し進展が見られなかったため、治療の話を一時中断し、最も好きな漫画やアニメを尋ねてみた。するといくつかのタイトルを挙げた後、中でも『ローゼンメイデン』⁽⁴⁾はこれまで出会った作品の中で最も好きであるという答えが返ってきた。中学3年生の夏休みに再放送を偶然視聴して以来、約2年間のファンであるという。特に水銀燈というゴシック系のドレスを身にまとったクールなキャラクターが好みであり、自慢のフィギュアをクローゼットから取り出して見せてくれた。援助者は、作品名こそ知っていたが、漫画もアニメも見たことがなかったため、Mから2時間に渡り解説を受け、また、この漫画作品の第1巻から7巻までを読ませてもらった。この訪問の結果、新たに情報として得たこの作品を接点とし、交流を重ねることでMを再受診へ導く方針へと変更することとした。翌土曜日の夜の訪問においても、Mのローゼンメイデン論は続き、夜8時からこのアニメ作品を鑑賞することとなった。およそ2話終わるごとにMは淡々と次のDVDへと交換していき、鑑賞会は第1シーズン、第2シーズンの計24話、11時間（翌朝7時まで）に及んだ。その後も、ドラマCDを一緒に聴いたりするなど、ローゼンメイデンを巡る交流は週3日が3週間続いた。

Mは援助者との接点日周辺は非常に落ち着いており、自らも「（自傷を）忘れている」と述べ、ゴシック・パンク、ローゼンメイデンを通して、Mと援助者との間にはラポールは形成されつつあるように思われた。しかし、通院への拒絶が緩和されるまでには至らず、また、援助者がMの落ち着きを確認したことで訪問間隔をひとたび長くすると、Mの自傷が再発するという繰り返しであった。この時点で援助者にとって数少ない好材料は、「自殺の願望（それによる擬似自殺）」や「エスカレートによる麻痺（毎回傷が深くなること）」の傾向が見られなかったことである。一方で、「スラッシュは美しい勲章」など、自己陶酔的な発言（自己陶酔）も度々聞かれた。この点については、リストカッターに対峙してきたカウンセラーから、「ファッションリスカ（ファッションとしてのリストカット）が習慣化したケースに似ている」、また、「希死念慮の薄いMの自傷は軽微なものであり⁽⁵⁾、適切な代替療法を見つけ出すことができれば、自傷癖を解消できるのではないか」というスーパーヴァイズを受けた。

2-3 第3フェイズ：援助計画の再変更及び再々介入

Mの自傷に関する相談を受理して6週目（6月第1日曜日）、1ヶ月前にMの希望で訪れたショッピングビル内のフィギュア専門店へ向かった。援助者がかつて支援していた自傷癖のある少女（高校1年生）が、当時、手

や口から血を垂らしたグロテスクなデザインでありながらピンク色の可愛い熊『グル〜ミ〜』⁽⁶⁾を愛好し、様々な「可愛い」動物のフィギュアを買って来ては、自作の血糊を塗ることで自傷を回避していたことがあった。また、この少女は自分の手首に血糊を塗ることもあり、いわゆる代替療法を自ら見つけ出したのであった⁽⁷⁾。今回Mと訪れたフィギュア店にはグル〜ミ〜も販売しており、援助者はそれをMに紹介する予定であった。しかしながら、Mはグル〜ミ〜には全く興味を持たず、援助者の計画通りには進まなかった。

1時間程度このフィギュア店に滞在した後、Mと援助者は隣のドール専門店に入店した。そこには日本に昔から浸透しているファッションドール（リカちゃん人形、バービー人形など）とは異なる、大きくて精巧な球体関節人形（主に『スーパードルフィー』⁽⁸⁾）が数多く展示されており、Mと援助者はこれらに驚いた。また、一般的な玩具店の人形コーナーとは異なり、ボディ各種（頭、体、肢体）やドールアイ、ウィッグ、衣装など、自らの趣向に合わせてドールを製作・改造（カスタム）するためのパーツも販売されていた。人によってはやや奇怪にも見えるそれらの商品は、Mにとって非常に興味深いものであったようで、店内を回りながら熱心に眺めていた。そして、Mが最も惹かれたものは、『プーリップ』⁽⁹⁾というファッションドールのローゼンメイデンモデルであった。これまでMが嗜好してきたフィギュアとは異なり、（ドールに物語性を委ねている）ローゼンメイデンのコンセプトを直に反映している商品とMには感じ取られ、すぐに興味を持った。しかし、1体が1万円以上することや、Mが最も所望する水銀燈モデルが完売であったことから購入できず、この店も1時間ほどで出た。その帰途、「水銀燈（モデル）も興味あるが、カスタムもやってみたい」とMは何度か口にした。

この夜、援助者は『ブライス』⁽¹⁰⁾の愛好家である知人と連絡を取り、ドールの中古品を安価で販売しているリサイクルショップの紹介を受ける。翌日、カスタムした痕跡が数多く残るために破格値（3千円）で売り出されていたプーリップ1体⁽¹¹⁾をこの店で購入し、その夜、Mの自宅へ向かった。かなり使用感のあるドールであったがMは大変喜び、その後小遣いをやりくりしてパーツを購入していき、カスタムに興じるようになっていった⁽¹²⁾。その後Mは、この当時の事柄について、「最初に新品のドールをもらっていたら、もったいなくてウィッグを剥がしたり、ヘッドカバーを外したりできなかったと思う」と、中古品であったことが幸いしたと述懐している。また、完成品はMには高価すぎたが、例えば、アクリルアイは百円均一ショップや手芸店において安価で入手可能なため、カスタムドールはMにとって手の届く範疇の趣味となりえた。

2-4 第4フェイズ：援助の継続と終結

Mがカスタムドールに熱心に取り組み始めて2週間、Mからは「あれから全くやってない（自傷に及んでいない）」と報告を受けた。第2フェイズにおいては、援助者との接点がなくなると即再発していたため、ここで試験的に訪問間隔を週2日から週1回に空け、Mの動向を確認することになる。6月第3週より、Mはパーツ購入資金を得るため、夕方から5時間、弁当専門店でアルバイトを開始する。7月下旬には、中古のプーリップを2体購入し⁽¹³⁾、それをカスタマイズし始める。Mがカスタムドールを開始した6月9日より40日後、Mと母親、一時帰宅した父親との面談において、「この2ヶ月ほど一度も自傷に及ばず、また、いずれ左手の傷跡除去手術をしたいので手術費用を出してほしいと父親に頭を下げた」との報告を受けた。8月上旬、傷跡除去のレーザー手術を受けるため、Mは母親と専門医に出向いたところ、心療内科の受診と平行して治療を進めるという方針が示され、この連絡を援助者は受けた。そのため援助者は、過去においてMが受診を拒絶した経緯を担当医に電話連絡する。Mの傷跡が浅かったことや、Mが自らカスタムドールを自傷の代替としていたことから治療は順調に進み、8月31日をもって援助終結とした。さらに5ヶ月経過した時点でもMのカスタムドールの趣味は続き、同時に再発も一切ないとの報告を受けた。

Ⅲ. 考 察

1 I Pの言説による新しい物語の生成の効果

エンパワメントやストレングスの視点に立ったアプローチは珍しいものではない。むしろ、現代の医療、教育、福祉などにおける援助指針の中核を成していると言っても過言ではない。本稿において議論を進めたいのは、エンパワメントやストレングスを重視した援助の「手法」であり「過程」である。

前節に要約したように、本事例では、I Pの自己決定権を尊重し、また、I Pが援助者と出会うまでにI P自身が培ってきた文化資源を有効的に活用する指針の上に援助を進めている。I PにはI P独自の生育環境や生育歴があり、他者と似ている部分こそあれ、決して同一の資源を保有していない。本事例においては、転移と逆転移が円滑に活用できるI Pの性格に頼ることができたため、ゴシック・パンク、アニメーション、カスタムドールとおよそ3回のイテレーションでたどり着くことができた。ここで問題となるのは、I Pの資源の何に焦点を当てるかである。I Pやその家族から出される主訴や副訴に直接的に結びつくような資源、例えば、I Pの性格や友人関係、食べ物の好き嫌い、そして、将来の夢などは、抽象的すぎたり、あるいは学校的文化に縛られていたりするため、「こうしなければならない」という強迫的な観念に苛まれるI Pも少なくない。したがって、本事例においても、I Pが自己肯定感を抱きやすくするために、I Pが保有する「脱学校的文化」的な資源に着目し、その範疇においてイテレーションを重ねている。特に、自傷やひきこもり、不登校などの児童や若者に対峙する時、彼らの内で自責や焦り、苛立ち、劣等感、無力感などに帰結する恐れが可能な限りない分野へと援助者が誘導していくことが必要である。援助開始前から直後にかけて、I Pにとっての弁護機能（アドヴォケイター）に援助者が徹しながら⁽¹⁴⁾、I Pが潜在的に保有する資源の独自性を見出し、協働関係を形成していくことが必要であろう。また、漫画やアニメーションなど、フィクショナルなデータを援助に利用することの妥当性、有用性は、そのデータが持つ「共有性、常識性、日常性、表現の文化的拘束性」（山村、1971）に基づいていると考えられることができる。

その上で、重きを置くのがnarrative approachによりI Pの言説を記録する作業である。I Pの嗜好を中心として掘り下げる過程において、I Pの認知・認識形式や方法といったスキーマを、I Pにとっての自己的な効力や強さ、有用性に結びつけることのできる物語を援助者がI Pと共に再構成する。また、この物語の再構成において、ケースによっては、最終的にI Pが持ち合わせていない資源を新たに保有させる場面へと結びつけていくこと（本事例においては、手段としてのカスタムドール）も効果的である。ただし、カスタムドールに自傷の抑止効果を期待すること（自傷の代替療法として認めること）には、今後議論を重ねる必要がある。本事例においてカスタムドールを導入した理由は、あくまでも専門医療機関での治療を促進させるための手段としてであり、カスタムドールそのものに治療効果を求めたわけではなかった。結果として抑止が働いたが、その因果関係の実証ができたわけではない。I Pが時間を忘れるほど夢中になることができる「何か」が偶然カスタムドールであったかもしれないし、あるいは、人の形をしたドールにメス（ドライバーやニッパー）を入れることが切ることの代替行為（自分の分身を切る、自己破壊願望のはけ口）となったかもしれない。さらに、自己陶酔型のI Pにとっては自己実現や投影として理想型をドールに託したゆえの抑止であったかもしれないなど、数多く考えられよう⁽¹⁵⁾。

2 I Pの言説に重点を置くアプローチにおけるリスク

I Pの脱学校文化的資源に着目したアプローチにおいて、リスクやデメリットなど、留意すべき点多々存在する。

ひとつに、I Pの独自性に重きを置く流動的な対応は、場合によってはI Pの数だけの過程を経なければなら

ないという点である。本事例においても、援助者は過去の事例を参考にしながらも、不案内である分野（アニメーションやカスタムドールなど）に足を踏み入れている。IPの土壌を利用しての援助は、援助者よりもIP側に豊富な知識や経験が存在するため、ケースごとに援助者に新たな勉強を押し付ける困難がつきまとう。援助者によっては、新たにIPが持つべき資源の再配置を協働的ではなく、援助者が率先して行ってしまう初歩的な過ちをおかす危険性も高い。また、本事例では3回のイテレーションで終結しているが、ケースによっては、さらに複数回は必要となるIPも存在する。その度に新たな知識と経験を身につけなければならないため、効果が見られない、期待できないという結論に達しがちであり、その際、自傷やひきこもり、不登校のケースでは、強制的に医療対応にシフトしようとしてしまう援助者も見受けられる。このような迂回行為（ワーク・アラウンド）は、IPと援助者のラポールが薄弱な事例にこそ多く発生し、悪化や再発の引き金となりかねないので注意が必要である⁽¹⁶⁾。

本事例で検討するアプローチの最も難度の高い点は、協働による援助関係の終結の時機を見極めることである。IPの嗜好に即した援助は、IPと援助者の距離を近くすることが可能である。しかし、その一方で援助者が逆転移の度合いを計り損ね、関係が一気に崩れることもあるが、多くはIPが援助者から自立できなくなり、終結の遅延や拒否がなされることもある。一方で援助者も、IPと築くことのできた近しい援助関係を終結させることで、IPが問題のリバウンド（スリップ）を起こすのではないかという不安にかられることもある。それゆえに、介入時のみならず、終結時周辺は、援助者がイネイブラー（結果的に問題行動を助長させる人）となる危険性も持ち合わせていることは注意すべき点であろう⁽¹⁷⁾。

IV. 結びにかえて

Buber (1923) は“*I-Thou*” Relationship、「我と汝の対話関係」を説いた。本稿で採り上げる手法は、この“*I-Thou*” Relationshipの概念を尊重する。IPが100人存在するならば100通りのケースが存在すると考え、彼らひとりひとりとの対話を最も重視し、彼らの内にある資源を問題の解決のために肯定的にリサイクルする手法である。特に近年、更正施設に閉じ込め、暴力的な矯正・治療を進めた事件もあり、その反動からか本手法が「主体性を重んじた個別援助技術の肝に則っている」と評価されたこともある。しかしながら、福祉や教育の世界において繰り広げられている全てのサービスには、善意がはらむ危険性が常につきまといまう。人間対人間であるからこそ可能な手法には、人間対人間であるからこそ陥る落とし穴もある。残念ながら、本手法ははまだ諸刃の剣である。ひとつの事例の成功は、偶然と偶然が重なり合って導かれていることもあり、別の事例では成果を見出せないかもしれない。それでも、この手法を実践する度に援助者の心に去来することは、ややトートロジーめくが、やはり援助関係の基本は我と汝、汝と我につきるということである。今後、IPによりよい援助の提供ができるよう、本手法を改善・修正しながら効果を上げていきたいと考える。

註

- (1) 本節「問題の背景と経過」は第1フェイズのインタビュー面接（フィールドノート）から構成している。
- (2) この時点において、Mとの協働関係（パートナーシップ）、もしくはラポールが構築できておらず、尊重、受容、信頼の観点から、Mの混同を指摘しないように努めた。
- (3) また、Mはアルバイトをして、ヴィヴィアンウエストウッド（イギリスのパンクファッションの有名ブランド）のペンダントを手に入れたいと発言した。『NANA』（矢沢あい原作の人気漫画作品で、パンクファッションが採り入れられている）のファンの知人女性はそのペンダントを所望していたためであった。この

- 女性は、Mの中学時代の同級生（別の高校に進学）で、1ヶ月に数回メール交換をする唯一の友人であった。
- (4) PEACH-PIT原作の人気漫画作品。後にアニメ化。ひきこもりの少年が意思を持って稼働するアンティークドール（球体関節人形）との出会いによって、成長を遂げていく物語。
 - (5) 当初Mが診察を受けていた医師からも、人格障害（境界性や自己愛性、解離性など）との結びつきはないと診断されていた。実際、「もう一人の自分が命令する」などの倒錯的な発言はなかった。
 - (6) 森チャック創作デザインの熊のキャラクター。
 - (7) この少女は、血糊を「本来つけてはいけない所」に塗ることを代替行為としており、グロテスクなものに興味を持っているわけではない。例えば、リビング・デッド・ドールズ（Living Dead Dolls）のようなドールは、彼女にとってただ恐ろしげなだけであり、切る行為の代替とはならなかった。
 - (8) 株式会社ボックスの球体関節人形。ドールとフィギュアからなる造語。完成品よりもカスタムが主流。
 - (9) 株式会社ジュンプランニングのファッションドール。
 - (10) ネオブライス。株式会社タカラトミーのファッションドール。アメリカ・ケナー社のレプリカドール。
 - (11) ASSA（F-538）。
 - (12) Mは主にインターネットのドール専用サイトなどを参考にして、カスタマイズの手法を覚えていった。
 - (13) RIDa（F-549）及びeternia（F-561）。
 - (14) 例えば、サブカルチャーに理解を示さない向きへのインフォームド・コンセントは欠かせない。カスタムドールの場合も、「人や動物へ危害を加えるのではないかと心配する声があがることも想定される。本事例では、導入の目的、過去に危害を及ぼした事例がないこと、援助者の監督のもと行うことなどを保護者に事前に説明をし、了承を得た。
 - (15) ただし、本事例に関しては、「人形＝ピグマリオンイズム」の構図やフェティシズムとの関連性は薄いと思われる。IPはカスタムドール以前に既に「完成品」の美少女フィギュアを愛好しており、その際には自傷が抑止されることはなかったが、「カスタマイズ」を知ったことが抑止につながっている。
 - (16) その一方で援助者は、家族による監護義務が著しく損なわれていると判断した場合（児童福祉法による対処）、傷害行為や非行を繰り返す場合（少年法）、希死念慮などの重い精神障害が認められる場合（精神保健福祉法）などを想定し、常に法を視野に入れた対応も計画しておく必要がある。
 - (17) さらに、IPの資源を利用することは、援助者とIPの家族との間にガイドラインが必要である。単なる「甘やかし」というような認識から家族に受容されないことも想定し、複数回のインフォームド・コンセントが不可欠である。逆に、甘やかし解消を目的とした教育的・矯正的方針が強制機能（AをしなければBとならないというシステム）として働き、悪循環を引き起こす可能性も持ち合わせている。例えば本事例では、IP自らがアルバイトによって趣味の資金を捻出したが、援助者や家族が「自分の趣味に費やすお金は、自分で働いて稼ぐもの」という強制機能を働かせる場合、IPに過度な不安感を与え、家庭内暴力や非行、自傷の悪化に直結する場合もある。

参考文献

- 1) BUBER, M. 1923, Ich und Duhas [I and Thou], Free Press.
- 2) SALEEBEY, D. 2001, The Strengths Perspective in Social Work Practice, Allyn & Bacon Published.
- 3) WINSLADE, J. and MONK, G. 2000, Narrative Mediation : A New Approach to Conflict Resolution, Jossey-Bass.
- 4) 山村賢明 1971『日本人と母 ―文化としての母の観念についての研究―』東洋館出版社。